飯山市埋蔵文化財調査報告　第28集

田草川尻遺跡 Ⅶ

—L・M・N・O地点の調査—

1991・11

長野県飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第28集

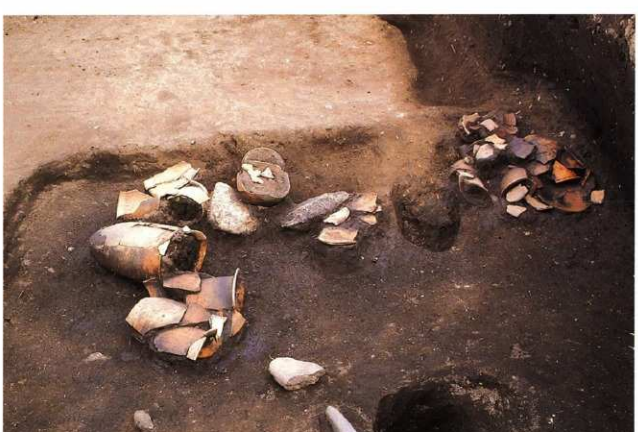
田草川尻遺跡 Ⅶ

—L・M・N・O地点の調査—

1991・11

長野県飯山市教育委員会

H20号 住 居 址 （古墳時代）



H21号 住 居 址 （古墳時代）

◈ 序 ◈

飯山市秋津地区に所在する田草川尻遺跡は、弥生時代から古墳・平安の各時代にわたり大集落が営まれた遺跡として、県内でも重要な遺跡として知られています。ところが昭和47年に国道117号線の静間バイパスが遺跡を縦断して建設されるとともに、飯山市の玄関口として近年開発が進みつつあります。その多くは店舗等の商業用地として造成が行われており、埋蔵文化財との調整も難しいところがあります。

今回の四か所に亘る調査は、それぞれ商業地として業者からの委託によるものですが、各原因者の快い理解と協力の下に実施することができました。

本書が発刊されるにあたり、上記の方々に感謝申し上げるとともに調査に携わっていただいた関係者各位に厚く御礼申し上げます。また、本報告書が今後の埋蔵文化財保護の一助になることを祈念して序といたします。

平成3年11月

飯山市教育委員会
教育長　岩　崎　　彌

例　言

1　本書は、長野県飯山市大字静間字四本木に所在する田草川尻遺跡の緊急発掘調査の報告書である。

2　調査地点は、従来からの調査地点名を続けて、L・M・N・O地点と呼称した。

3　各地点の原因者について以下のとおりであり、経費については各地点別の原因者の全額負担による。

L地点　千曲商事有限会社（関甲社長）
M地点　有限会社鈴電（小野沢清社長）
N地点　アルプス管工株式会社（山嵜茂社長）
O地点　株式会社荒井屋（荒井泰社長）

4　調査は、平成2年4月16日から5月25日まで行った。

5　調査にかかる組織・参加者は裏表紙に記載した。

6　本書の作成は、調査員のほか桃井伊都子があたった。また、執筆・編集は調査員の整理作業に基づいて望月が行った。

目　次

Ⅰ　田草川尻遺跡概観 …… 1
　A　遺跡の位置 …… 1
　B　過去の調査 …… 2
Ⅱ　調　査 …… 2
　A　経過と調査の方法 …… 2
　B　調査の経過 …… 5
Ⅲ　発見された遺構と遺物 …… 7
　A　L地点 …… 7
　　1　調査区 …… 7
　　2　遺　構 …… 7
　　3　遺　物 …… 13
　B　M・N・O地点 …… 17
　　1　調査区 …… 17
　　2　遺　構 …… 20
　　3　遺　物 …… 20
Ⅳ　写真でみる調査の成果 …… 27
　A　発掘調査 …… 27
　B　出土品 …… 40
あとがき …… 42

Ⅰ　田草川尻遺跡概観

A　遺跡の位置

田草川尻遺跡は、長野県飯山市大字静間字四本木から大字蓮字北原にかけて、縄文時代から中世に亘って断続的に集落が営まれた大複合遺跡である（図１）。

甲信国境に源を発する千曲川は、佐久・上田盆地を流下し、長野市川中島付近で犀川を合せ肥沃な善光寺平を形成する。善光寺平東縁に至ると、東側の長丘丘陵、西側の斑尾山麓の隆起地帯を穿入蛇行する。そして、中野市古牧地区の長丘丘陵北端に至ると再び流域を広げ信濃に最後の平を形成する。これが飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると信越国境の山岳地帯を再度穿入蛇行し越後へと流れ去り、信濃川と名を改める。

田草川尻遺跡は、飯山盆地が展開する最初の地点に位置する。東側に高社山が聳えているために比較的狭長な沖積地を千曲川が流れ、善光寺平と飯山盆地との回廊口的な地点となっている。

飯山盆地西縁は上境～鬼坂断層線によって画されているために急傾斜をもって斜面に接している。そのため山地から流出する河川は急流をなし、斜面の急な小扇状地を形成している。遺跡の位置する秋津地区でも三つの扇状地が発達している。すなわち、北から清川・田草川・宮沢川による各扇状地である。

田草川尻遺跡は、このうち田草川扇状地扇端部に立地する。南側は宮沢川の扇状地と千曲川の沖積地に接しており、北側は清川扇状地との間の低湿地帯に接している。また、東側は千曲川が扇状地扇端部を抉るように（攻撃斜面）流れており、その比高差は５ｍである。近年では千曲川の増水のたびに冠水しているが、これは広い低地をもつ対岸の中野市岩井地区が築堤されたためで、それ以前は冠水することはなかったという。

今回の調査箇所は、田草川の北側で、南側に比して遺物分布の希薄な地区としてとらえられていた。現況は、アスパラを主体とする畑地である。

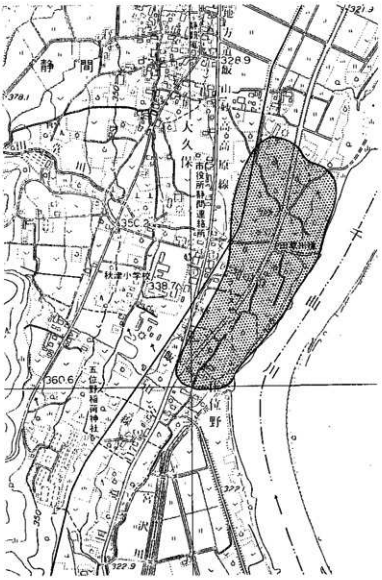


図１　田草川尻遺跡の位置（1:10,000）

B　過去の調査

遺跡は、過去6回の発掘調査がなされている。第1次は昭和47年で、国道117号線静間バイパス敷設工事に伴うものであった。バイパスは遺跡の中央を横断する形となり、加えて中野市・豊田村と飯山市を結ぶ主要路線であることから、バイパス供用開始からまもなく第1表のとおり工場・店舗などの進出が始まることとなった。特に、昭和52年の発掘調査は遺跡の中心部分と考えられ、弥生時代や古墳・平安時代の住居址が計23軒検出されている。また、出土した弥生時代後期の土器を報告した太田文雄は、田草川尻Ⅰ式・Ⅱ式に分類し、北信濃飯山地方の弥生時代編年の組み立てに着手している(太田　1982)。

次	調査年	調査区	調査面積	調査原因	特記事項
1	昭和47年	A～E	600㎡	国道117号線バイパス敷設工事	古・平住居、古祭祀
2	昭和52年	F	1,500	工場用地造成	弥～平住居
3	昭和57年	G	78	店舗建設	古土器
4	昭和60年	H・I	164	国道117号線改良工事	古・平土器
5	昭和62年	J	110	店舗建設	平掘立
6	平成元年	K	180	店舗建設	平住居、中井戸
7	平成2年	L～O	2,000	工場・倉庫・店舗建設	本報告

表1　田草川尻遺跡発掘調査一覧

Ⅱ 調　査

A　経過と調査の方法

1　経　過

L地点　原因者　千曲商事有限会社（関甲社長）

大字静間字田中148-1 ほかにおいて、コンクリートプラント及び関連工事を計画。

平成元年11月24日付で、埋蔵文化財発掘調査届けを提出。

平成2年1月8日付で、県教育委員会教育長より『飯山市田草川尻遺跡の保護について』の通知があり、事前に発掘調査を実施して、記録保存を計るという回答がある。

平成2年4月2日付で、千曲商事有限会社と飯山市長との間で発掘調査委託契約を交わす。

同　埋蔵文化財発掘通知を提出。

平成2年4月19日、発掘調査を開始する。

M地点　原因者　鈴電株式会社（小野沢清社長）

大字静間字四本木2166-1ほかにおいて、店舗・倉庫建設を計画。

平成元年9月12日付で、小野沢氏より埋蔵文化財発掘届けが提出される。

平成元年9月26日付で、県教育委員会教育長より『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があり、工事着手前に発掘調査を実施するように指示がある。

平成元年10月12日、県文化課小林指導主事・市教委・小野沢氏で現地協議を実施する。

平成元年10月18日付で、埋蔵文化財発掘通知を提出する。

図2　田草川尻遺跡と調査地点（L・M・N・O）（1:2,500）

平成元年11月4日付で、県教育委員会教育長より『店舗および倉庫建設に伴う飯山市田草川尻遺跡の保護について』の通知があり、事前に発掘調査を実施するよう回答がある。

平成2年5月2日、小野沢氏と飯山市長との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を交わす。

平成2年5月18日、発掘調査を実施する。

N地点　原因者　アルプス管工株式会社（山嵜茂社長）

大字静間字四本木2166-2ほかにおいて、店舗建設を計画。

平成2年4月1日付で、山嵜氏より埋蔵文化財発掘届けが提出される。

平成2年4月13日付で、県教育委員会教育長より『周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について』の通知があり、事前に発掘調査を実施するよう指示がある。

平成2年5月7日付で、山嵜氏と飯山市長との間で、発掘調査委託契約書を取り交す。

平成2年5月10日付で、埋蔵文化財発掘通知を提出する。

平成2年5月22日、発掘調査を開始する。

O地点　原因者　株式会社荒井屋（荒井泰社長）

大字静間字四本木2143-3ほかにおいて、店舗建設を計画。

平成元年11月21日付で、荒井氏より埋蔵文化財発掘届けが提出される。

平成2年3月23日、県文化課・市教委・荒井氏と現地協議を行う。

平成2年3月30日付で、県教育委員会教育長より『店舗建設に係る田草川尻遺跡（飯山市）の保護について』の通知があり、事前に試掘調査を実施するよう指示がある。

平成2年3月30日付で、埋蔵文化財発掘通知を提出する。

平成2年5月7日付で、荒井氏と飯山市長との間で発掘調査委託契約書を取り交す。

平成2年5月11日、発掘調査を開始する。

2　調査の方法

過去の調査において、それぞれ遺跡内の調査箇所をAから順次地点別に呼称していた。第6次までの調査でKまで使用していた。今回の調査区は、千曲商事株式会社の地区のほかの3地区は接していた。ただし、それぞれ委託契約を締結して全く別個の事業として進める必要があったので、事業ごとにL～Oまで4地点に分けて行うこととした（図2）。

L地点　千曲川河岸に接する場所で、対象面積は約2,300㎡であった。この地区にアスファルト合材プラント、操作室、地下重油タンクなど4か所において基礎工事を伴う工事であった。他は現状のまま地下に影響を与えないとのことであり、該当工事場所もはっきりしているためにその部分の約1,000㎡を発掘することとした。

発掘はグリット法とし、土地境杭の2点を原点として設定した。A－1グリット南東杭が基点で、A－4上にもう1点が存在する。

M地点　工事は店舗・倉庫建設で、建物の位置もほぼ決定しており、敷地面積347㎡のうちの60㎡以上を調査することとした。グリットは、他の2地点N・Oと同一のグリットとし、O地点の境界杭を使用して5mグリットを設定した。

N地点　工事は店舗建設であり、地区は傾斜のある場所であった。そのため建物面積は少ないものの、切り土する部分が多くこの地区を全面調査することとした。

O地点　約9,000㎡の広大な敷地に店舗・駐車場を建設しようとするものであった。建物は標高の高い西側に建設し、国道側には簡易舗装をした駐車場を計画していた。そのため、中央を横断する農道(市道)より東側は切り土し、東側はむしろ盛り土して地下に影響を与えないというものであった。したがって、切り土する部分の全面が調査対象となったが、前述のとおり予定外の調査であったのでとりあえず試掘調査を実施してその結果で対応することとした。対象面積は、120㎡。表土除去を行った結果では、遺物が多くの地点から散在して出土した。ただし、その数量も多くはなく、予定期間中に終了できる見込みとなったことから本発掘に切り替えた。また、地下に影響を与えない東側地区においても、遺跡の範囲状況を把握するために幅約3mのトレンチを入れて調査することとした。

B　調査の経過

1　調査日誌

L～O地点の発掘調査は、事業は別個のものであったが、近接しており一連の作業として行った。そのため、調査日誌もまとめて報告する。

平成2年4月15日（晴）　準備

16日（晴）　O地点試掘開始。土器片約10点出土。M・N地点も同様に表土除去。やはり土器片が約20点出土。

17日（曇）　O地点試掘続行。発掘器材運搬。L地点グリット設定。

18日（曇）　L地点杭打。E—1・2試掘。

19日（晴）　調査開始式を行う。L地点　A・B—1～3着手。A・B—2を中心として土器出土。古墳時代・平安時代土器が混在して出土するとともに、弥生式土器も少量出土。

20日（晴）　L地点　C—1～3を調査。北側に進むにつれ砂礫層となる。B—2柱穴確認。同土器集中地点確認し、セクションベルトを残して調査を進める。

24日（曇）　L地点　A—2で平安時代のカマドを確認するが、住居址は確認できず、B—3において弥生式土器壺2固体が出土。C・D—9着手。土器片数点出土するが、黒色土及び砂礫層となり、遺構は存在しないと思われる。

25日（晴）　L地点　A～C—1～3精査。柱穴・土坑確認するも明確でない。

26日（晴）　L地点　C・D—9前日に引き続き掘り下げるが遺構確認できず。A—2、B—3遺物分布図作成。

27日（晴）　L地点　C—1・2において住居址確認（H20号住居址）。遺構掘り下げ。遺物レベル測量、取り上げ。

5月2日（曇）　L地点　B—3弥生式土器微細図作成、取り上げ。A—2カマド（H—20号住居址）の周囲精査するもプラン確認できず。H—20号住居址プラン追及。

7日（曇）　L地点　H—20号住居址プラン確認。

8日（曇）　L地点　H—20号住居址掘り下げ。遺物分布図・レベル作成し取り上げる。

9日（曇）　L地点　H—19・20号住居址カマド着手。D—14着手するが、遺物わずかで遺構は確認されない。

10日（晴）　L地点　D—14砂礫層となったため調査を中止。A—12・13着手。柱穴8確認。H—19・20号住居址及び柱穴群、遺構平面図作成。O地点基準杭着手。

11日（曇）　O地点　グリット設定。T～W—12・13着手。

14日（曇）　L地点　平面図作成。

O地点　U—12、V—12において柱穴、遺物数点出土。雨で午後2時30分現場作業中止。

17日　L地点　遺構レベル測定し、全作業終了する。

O地点　Q～W—12・13精査。

M地点　グリット設定。

18日（曇）　O地点　R—12・13において柱穴検出。T～V—12・13平板測量実施。

M地点　調査開始。

21日（曇）　O地点　全体の平面・レベル作成。遺物取り上げ。

M地点　H・I—12・13黒色土～礫層間に土器出土。I—13で土層図作成。

N地点　調査開始。

22日（曇）　O地点　G—16付近で住居址検出（H—21号住居址）。

M地点　平板測量実施。

N地点　L～M—6～8精査。土器小片微量出土。

24日（曇）　O地点　H—21号住居址調査、遺物分布図作成。

N地点　全体図作成。

25日（晴）　O地点　H—21号住居址遺物取り上げ、平面図作成。

器材等の撤収。L～O地点の全ての調査を終了する。

引用・参考文献

飯山市教育委員会　1973.2　『飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書』

飯山市教育委員会　1978.2　『長野県飯山市田草川尻遺跡Ⅱ』

太　田　文　雄　1980.4　『北信濃弥生後期編年について』「信濃第32巻4号」

飯山市教育委員会　1984.1　『長野県飯山市田草川尻遺跡Ⅲ』飯山市埋蔵文化財調査報告第9集

飯山市教育委員会　1986.2　『長野県飯山市田草川尻遺跡Ⅳ』飯山市埋蔵文化財調査報告第13集

飯山市教育委員会　1988.3　『長野県飯山市田草川尻遺跡Ⅴ』飯山市埋蔵文化財調査報告第17集

飯山市教育委員会　1991.5　『田草川尻遺跡Ⅵ』飯山市埋蔵文化財調査報告第27集

Ⅲ　発見された遺構と遺物

A　L地点

1　調査区

調査区は、4か所に分かれているために便宜的にⅠ～Ⅳ区と呼称して説明を加えることとする（図4）。

本地区の土層の堆積状況は、図3に示すとおり、千曲川の氾濫による堆積層の砂層が表面を覆い、それはⅡ区の6ライン付近まで到達している（図3の1a層）。これは、概観でも触れたとおり対岸の岩井地区に築堤されたためで、近年になってからのことである。また、下層に至って4層に砂礫層が現われるが、これは田草川の氾濫による堆積物と考えられる。この堆積物は、基盤層となる5層以下の黄褐色砂礫層（更新世扇状地二次堆積物）と相違し、局地的に限られている。Ⅱ区の土層観察では5ラインにおいて終結しており、4以下には及んでいない。したがって、B～Fラインの間の凹地部分に厚く堆積しているものと推察される。今回の調査地区は大半がこの氾濫源の部分にあり、Ⅰ区の氾濫が及ばない部分と、Ⅳ区の高台の部分が原始・古代においては占拠するに適した場所と思われる。調査の結果でもそのような結果が得られている。

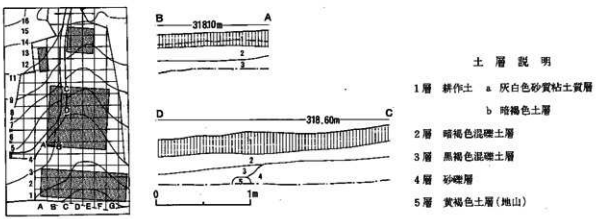


図3　L地点土層断面図（1:40）

2　遺　構

調査区はⅠ～Ⅳ区に別れているが、遺構の検出された地区はⅠ・Ⅳ区の二区のみである。Ⅱ・Ⅲ区は氾濫地域で、居住に適さない場所であったのだろう。また、Ⅳ区は35m²と小範囲なので柱穴が検出されたのみである。Ⅰ区はL地点で最も千曲川に接した場所であったが、古墳時代・平安時代の竪穴住居址各1軒を検出した。以下に各遺構別に説明を加える。

(1)　竪穴住居址

Ⅰ区H—19号住居址　Ⅰ区A—2において検出されたもので、プランを明らかにすることができなかったものの、カマド本体が発見されている（図6）。遺物は、A—2グリットを中心として平安時代の土器

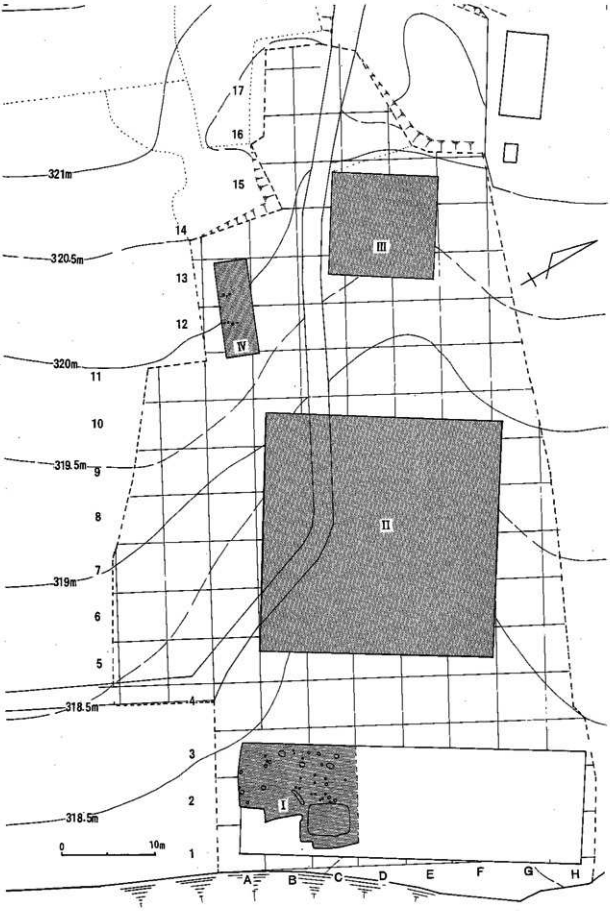


図4　L地点調査区全体図（1: 400）

が多く検出されている。また、カマド内においても土師器坏形土器が4点出土しており、平安時代に比定される。

Ⅰ区H—20号住居址（図7・8）、Ⅰ区C—1・2において検出された。規模は、455cm×335cmの長方形プランを呈し、確認面からの深さは10cmを計る。カマドは長軸東側の中央部付近に構築されており、特異な場所といえる。柱穴は5本検出されたが、主柱穴と考えられるような深さ・位置のピットはない。

遺物は、完形および略完形の甕がカマド付近にまとまって出土した。また、カマド内にも完形坏が出土している。

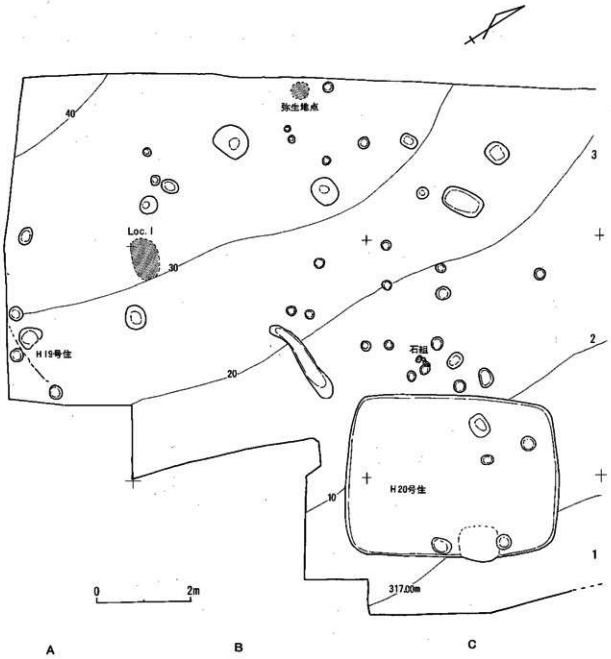


図5　Ⅰ区遺構分布図（1:80）

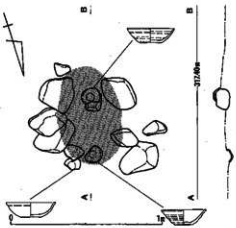


図6　H19号住居址カマド実測図（1:20）

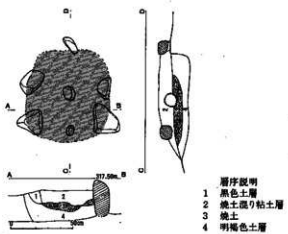


図8　H20号住居址カマド断面図（1:30）

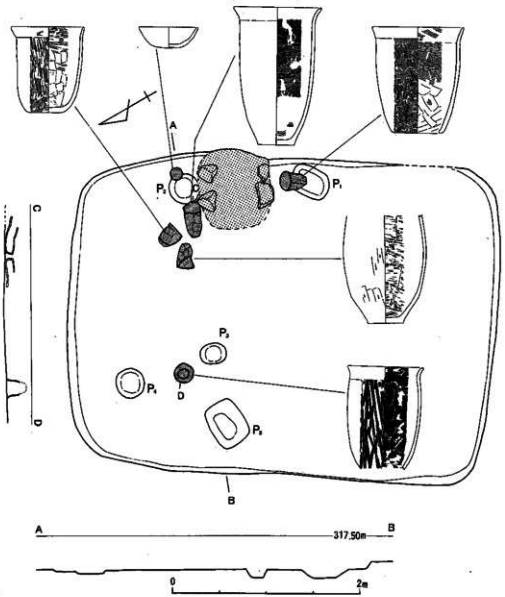


図7　H—20号住居址（1:40）

(2) 土器集中地点

Ⅰ区弥生地点　B－3区、調査区の西端において弥生式土器壺形土器が2点出土したものである（図9）。付近にも弥生式土器は検出されず、単独に近い出土状態である。砂層内の出土で小礫も混入しており、また、土器自体の傷みも認められることから流れ込みの可能性も考えられるところであるが、いずれも形をとどめていることからにわかには判断できない。付近に遺構は検出されなかった。

Ⅰ区第1地点　B－2区において、古墳時代の土師器破片が約100点まとまって出土したものである（図10）。レベル幅が約30cm認められたが、遺構は検出されなかった。

(3) 石組　Ⅰ区C－2において検出された3点の石からなる遺構である。当初H－20住居と住居が切りあい、カマドの一部かと考えたが、単独で構築されていることが判明した。確認面はH－20号住居と同一面である。焼土・遺構は認められなかった（図11）。

(4) 柱穴等

Ⅰ区検出柱穴　Ⅰ区において柱穴が計32検出されたが（図5）、掘立柱建物址となるような並びをもつものはない。

Ⅳ区柱穴群　A－12・13において8検出されている（図

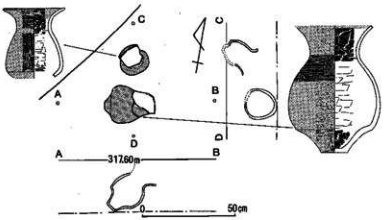


図9　弥生土器出土状態（1:20）土器実測図は¼

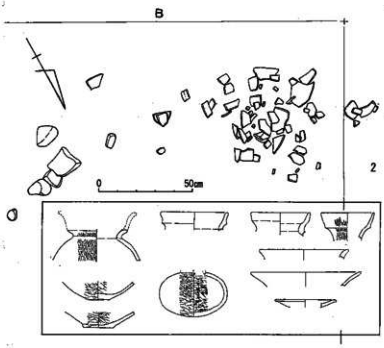


図10　遺物集中地点(Loc 1)分布図（1:20）

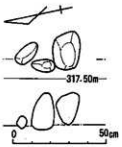


図11　C－2出土石組実測図（1:20）

12)。P_1～P_3およびP_5～P_8は並ぶが間隔が狭く建物とは考えられない。なお、P_4内より炭化物がまとまって出土した。時期は不明。

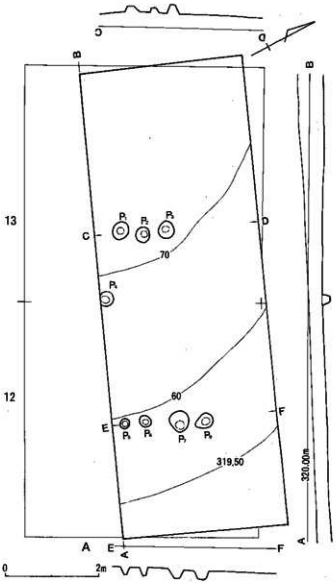


図12　Ⅳ区遺構分布図（1:80）

3 遺　物

L地点において出土した遺物は、各遺構を中心に出土したもので、弥生時代・古墳時代・平安時代の各時期に及ぶ。以下、時代別に説明を加えることとする。

(1) 弥生時代

Ⅰ区、弥生地点から出土した後期の2点の壺形土器である（図13―1・2）。1は、口縁部を欠くが略完形の土器である。胴部下半が大きくコケる器形を呈す。器表面は刷毛目調整ののち頸部から胴上位に3条の櫛描横走文と同工具によるT字文を描き、さらにその下部に1条1回刻みの簾状文を施す。器内外面とも丁寧にミガキが加えられ、文様帯以外の器表面及び内面の口唇部には赤色塗彩が施されている。2は小型の土器で、胴下半から底部を欠く。器形はラッパ状に大きく口縁が開き、肩の張らない胴部からコケながら底部に収束する。器表面が荒れており、全面が赤色塗彩されるが頸部の一部のみ残存する。

(2) 古墳時代

Ⅰ区、B―2の第1集中地点から出土した土器が中心である。遺構に伴うものでなく年代的にも幅が認められる。

第1地点出土土器（図13―3、5～7、10～13、20、21）

3・7は有段口縁の壺形土器で、外面はていねいなヘラミガキが施されている。5～7も同様であるが、胎土に砂を多く含みボロボロとした感じを受ける。12・13は、壺もしくは甕の胴下半から底部で、外面にはヘラミガキが行われている。21は口縁部を欠くが球状の壺形土器で、ヘラナデ調整が施されている。

H―20号住居址出土土器（図14―8～14）

出土した土器は甕形土器（8～12）と杯（13・14）である。8は、焼成後底部を除去し、さらに面取りをしているために、甑として使用した形跡と思われる。12はヘラケズリ調整が加えられるが、他はハケメ調整が施されている。14はカマド内の出土で、加熱により剝落が著しい。

(3) 平安時代

H―19号住居址出土土器（図14―1～7）

Ⅰ区、A―2において検出されたカマド及び周辺より出土した土器を一括して述べる。図化した資料は土師器坏形土器及び須恵器破片の拓影で、数量的にも少ないが他に土師器甕も出土している。観察表にも掲載しているが、ロクロ土師器坏形土器の底部は糸切り痕をとどめる例（2～4）と、後にヘラケズリを行うもの（1・5・6）とが存在している。法量的には大差ないが、黒色土器が器高・口径とも大きいようである。

グリット出土土器（図15）

多くの遺物はA―2より出土しており、H―19号住居址に伴う遺物と考えられる。1～4は坏形土器で1・3・5が土師器、2・4が須恵器である。底部の遺存するものはいずれもロクロ糸切り痕をとどめている。3・5は黒色土器で、5は高台つき坏もしくは椀であろう。6～7は土師器甕形土器である。6・7はやや内湾する形態を示し、9・10はコの字状口縁の形態を呈す。12～13は須恵器の甕で外面にタタキ目調整が見られる。12は平行タタキの後ナデにより多くが消されている。

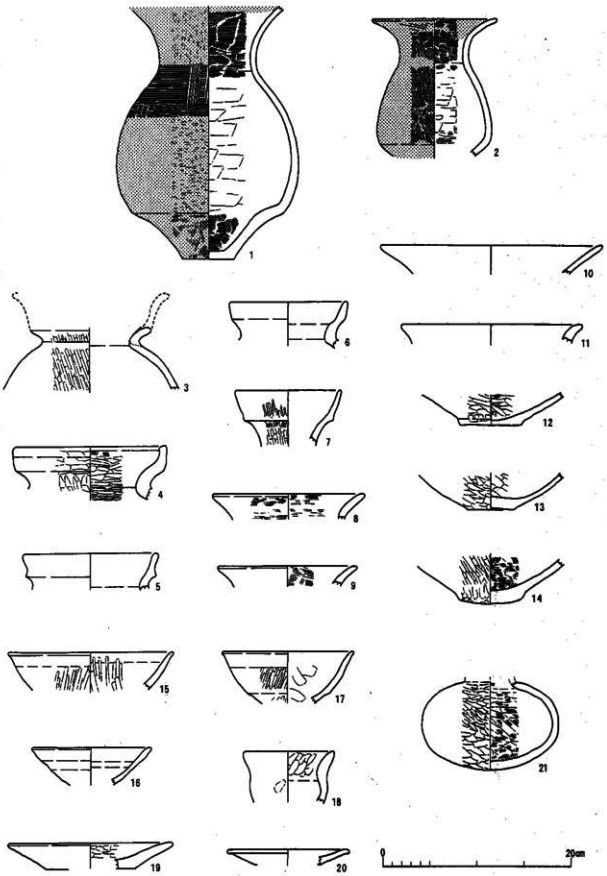
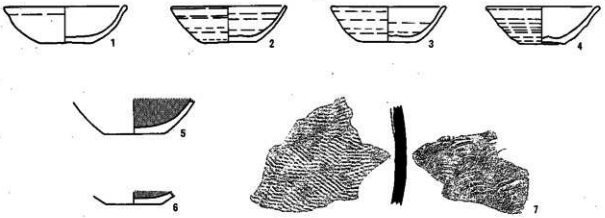
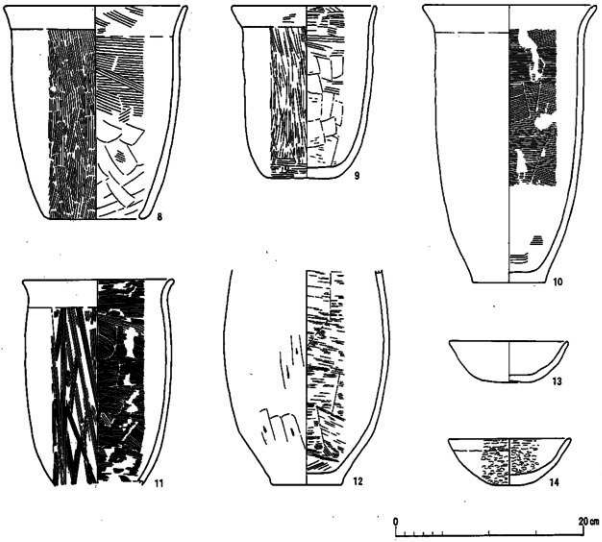


図13　L地点出土遺物 (1) (1：4)

TKG－L　③⑤⑥⑦⑩⑪⑬⑭⑮⑯は第1集中地点
その他はグリット



H19住



H20住

図14　L地点出土遺物 (2)（1：4）

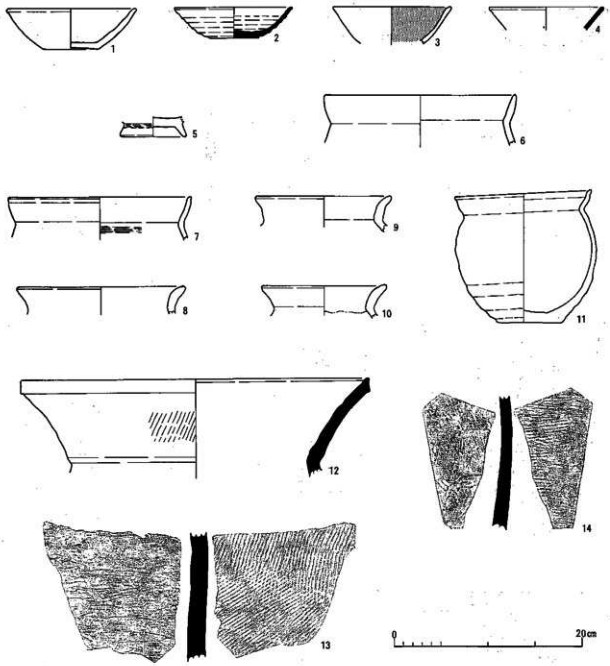


図15　L地点出土遺物 (3)（1：4）

B　M・N・O地点

1　調査区

M～O地点は、それぞれの原因による別々の事業であったが、近接しており本稿では一括して報告することとする。本地区は昭和60年7月、国道117号線県単改良工事（チェーン脱着場建設）に伴ない調査を実施したI地点に接する地区である。このときは、弥生時代・古墳時代の土器が出土したが、遺構などは検出されず流れ込みの可能性を指摘しておいた(飯山市教委　1987)。

(1)　M地点

やや北に緩く傾斜するが、ほぼ平坦である。約160㎡を調査した（図16)。本地区の層序は図17のとおりで、I・II層が暗褐色土で、その下位のIII層はブロックで認められる。砂礫が含まれており田草川の氾濫に伴うものではないかと推定される。IV層は本地区東端から始まり標高の低い東北側にむかって厚く堆積しているようである。V層は黄色褐色土で下位に至るにしたがって砂礫を多く含む。

遺物の包含層はIV層を中心としてそれより上位に含まれている。いずれも細片であり、土層の状態から流れ込みを含めた自然的営力により原位置を離れたものと考えられる。

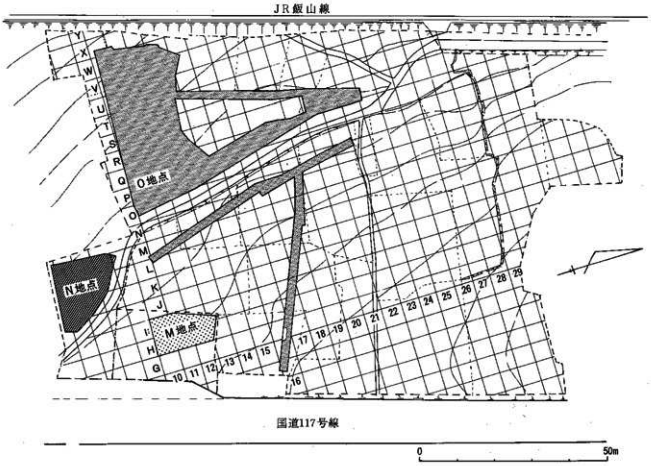


図16　M・N・O地点調査区（1:1,000）

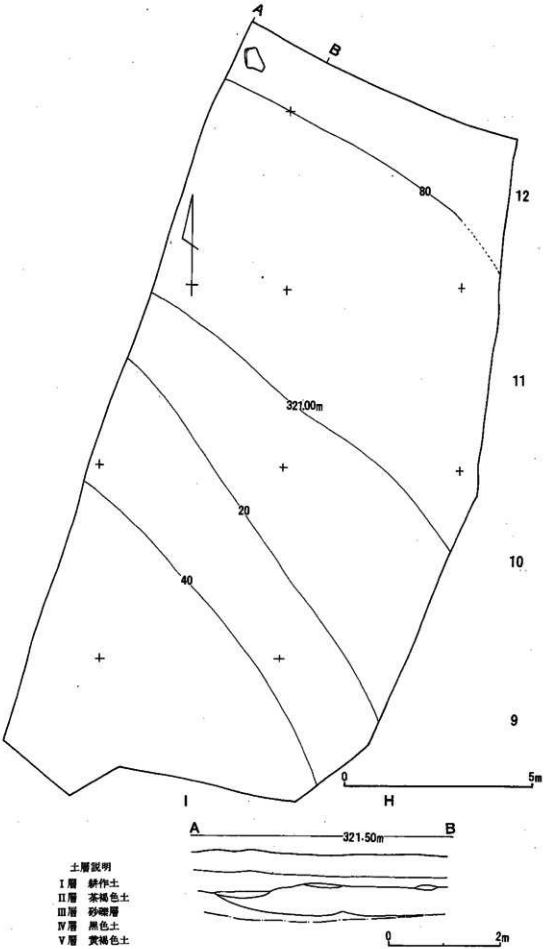

A
B
80
12
11
321.00m
20
10
40
9
0
5m
I
H
A
321.50m
B
土層説明
Ⅰ層　耕作土
Ⅱ層　茶褐色土
Ⅲ層　砂礫層
Ⅳ層　黒色土
Ⅴ層　黄褐色土
0
2m

図17　M地点調査区

(2)　N地点

L地点の西南30mの地区で、東に傾斜する地点である。調査面積は、約160㎡である（図16）。層序は基本的にM地点と同様であり（図18）、M地点のⅣ層が本地区のⅡ層に対応する。ただし、本地区の黒色土層は人頭大から小石大の礫を多量に含んでおり、田草川の氾濫流路の末端面と思われる。

(3)　O地点

M・N地点の西及び北側の広い部分である（図16）。開発計画によれば、対象地区のほぼ中央を走る市道の上位を削平し、それより下位を現状のままもしくは多少の盛り土を行うとのことであった。そのため削平部分を中心に調査することとし、盛り土地区においても遺跡の範囲を把握するためトレンチで調査することとした。本地区の層序は、上位面においては約20cmの黒色土の下位が地山面の黄褐色含礫層であり、下位面においては地山面まで100cmの黒色土が堆積していた。古墳時代後期の竪穴住居址はこの黄褐色含礫層を掘り込んで構築されている。

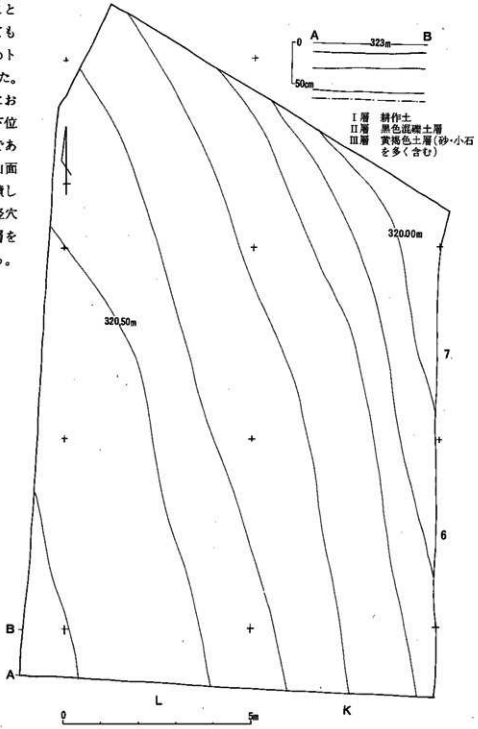


図18　N地点調査区

2 遺　構

M・N・Oの3地点において検出された遺構は、O地点の竪穴住居址1軒および柱穴のみである。M・N地点においては若干の遺物の出土があったが、流れ込みの可能性が高く、居住区ではなかったと考えられる。

(1) 竪穴住居址（H—21号住居址）

分布確認という性格上、トレンチにかかった部分のみを調査したため、約半分の住居址の検出にとどまっている（図19）。カマドが短辺のほぼ中央部と仮定すれば、460cm×320cmの長方形プランを呈するものと思われる。カマドは全部を検出できなかったが、粘土・石の混合で構築されている。左袖部のピットは、石づみの抜き取り痕と思われる。煙道はカマドより約1m延びている。周溝は長軸北側の一部のみに巡る。床面は、貼床にはしていないが堅緻であり地山の小礫が含まれている。

遺物は、カマド内及びカマドの北に接してまとまって出土した。バックホーにより一部破損してしまったが、ほぼ使用されたままの状態に近い出土状態である。カマド内からは、甕が二固体横に倒れて出土している。そのうちの1点には蓋がのせられていた。また、支柱と思われる土製品が2点出土している。カマド周辺から出土した遺物は、坏・甑各1点のほか甕形土器が5点出土している。いずれも横倒しているが使用した原位置の出土と考えられる。

(2) その他の遺構

M地点の東側、Q・R・U—11・12区において柱穴が8本検出されている（図20）。U—11から検出されたP_1～P_3は確認面より25～40cm掘り込まれている。平安時代の土師器破片が出土している。Q・R—11・12から検出されたP_4～P_8は直径10cm～20cmの小さな柱穴であるが、深さは18cm～31cmとしっかりと掘り込まれている。出土遺物はない。

なお、W—13において弥生式土器赤色塗彩された鉢破片が出土している。遺構は確認されなかった。

3 遺　物

(1) M地点出土遺物（図21）

当調査地点からは、古墳時代にかかる土器及び平安時代に比定される土器が出土した。いずれも細片であり、完形の土器はない。

古墳時代の土器（図21—1～8）

1・2は甕形土器の口縁部破片である。くの字状に強く外反する口縁形態をとり、胴部がやや下膨れで丸みを持ちつつ7・8のような底部を持つものと思われる。3・4は甑であろう。軽く外反する口縁形態を呈し、緩やかに収束しながら底部に至る形態を示す。5・6は坏形土器で、6は内黒土器である。

平安時代の土器（9～15）

1はロクロ土師器の甕形土器の口縁部である。北陸地方に一般的な丸底を呈する形態を示すものと思われる。10は甕形土器の底部で、糸切り痕をとどめている。11～14は土師器坏形土器で、11は内面が黒色処理されている。13の底部には糸切り痕をとどめる。15は須恵器坏形土器で、やはり糸切り痕をとどめている。以上の土器は、ロクロ土師器の底部調整・坏形土器の形態などから九世紀後半あたりにおかれるものと考えられる。

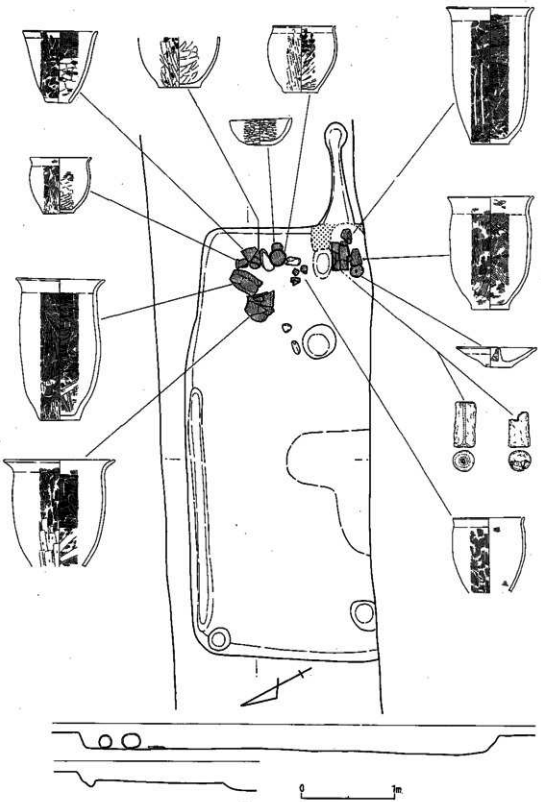


図19　H—21号住居址（1:40）

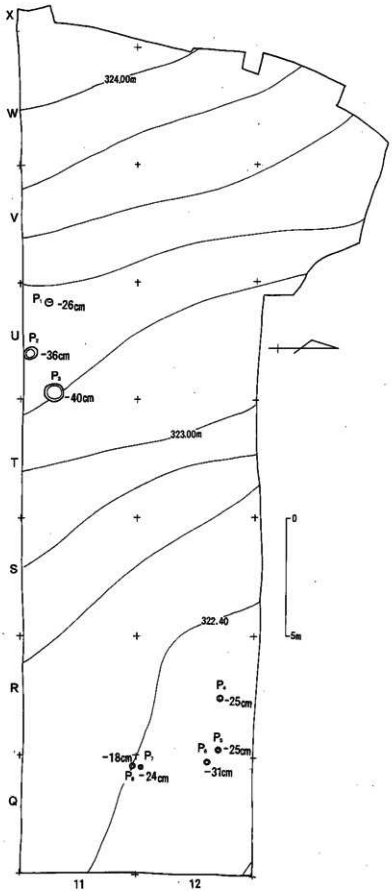


図20　O地点柱穴（1:80）

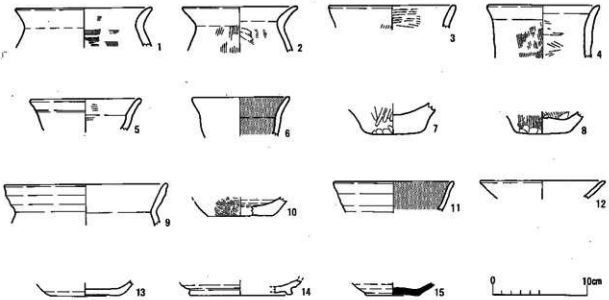


図21　M地点出土遺物（1：4）

(2)　N地点出土遺物（図22）

僅かな出土点数であり、いずれも氾濫層のII層よりの出土である。図示したのは2点のみであるが、他にも微小破片が数点出土している。1は台付甕の底部である。2は甕形土器の底部で、内外面とも丁寧にヘラミガキされる。

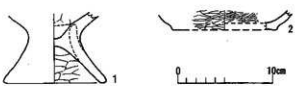


図22　N地点出土土器（1：4）

(3)　O地点出土遺物（図23～図24）

調査区内より出土した遺物には、H—21号住居址より出土した古墳時代の土器を中心として、他には縄文式土器破片1点、弥生式土器破片数点が出土している。ここでは古墳時代の遺物を主に説明することとする。なお、縄文時代の土器は左下がりの単節斜縄文が施されている前期の土器で、弥生時代の土器は櫛描波状文が施された。甕形土器破片、赤色塗彩された鉢破片などで、後期に比定される。

H—21号住居址（図23・図24—2～5）

出土した遺物には、甕形土器、甑、杯、蓋、土製支脚などがある。甕形土器には長胴甕（1・2・3）、短胴甕（6・7・14）、その中間形態の4・5・9、くの字状に強く外反し球状の胴部をもつ8などバラエティーがある。調整・整形技法は、内外面ともハケメ調整が主体であるが、短胴甕の6などはていねいにヘラミガキが行われる。甑は同形態のものが2点出土している。緩く外反する口縁形態からほとんど膨らむことなく底部へ収束する形態をとる。調整はハケが多用されている。図24—2は蓋であり、図23—3の口縁に接しての出土である。皿ないし坏状の形態を呈し、内面中央部に指頭圧痕のある把手状の突起をもつ。3はややいびつな坏である。内外面ともヘラ調整が加えられている。4・5は土製支脚である。カマド内より出土した。粘土塊を手で棒状に押圧して形態を整え、中央を径4㎜の穿孔が開けられている。5は加熱により破損したものと思われる。4と相違し穿孔されていない。

グリット出土遺物（図24—1）

U—12より出土した甕形土器である。くの字状に外反し、球状の胴部をもつものである。ヘラミガキが加えられている。

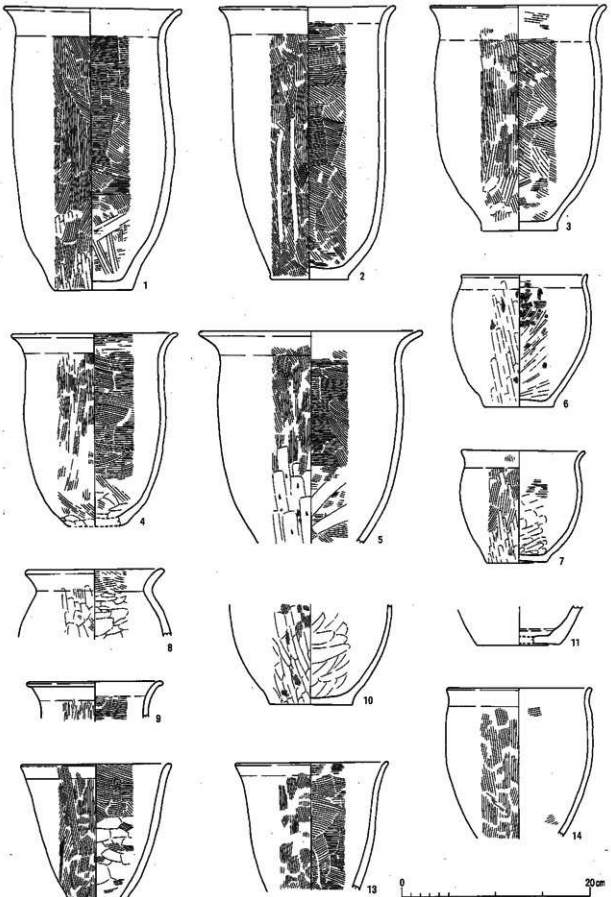


図23　O地点H－21号住居址（1:4）

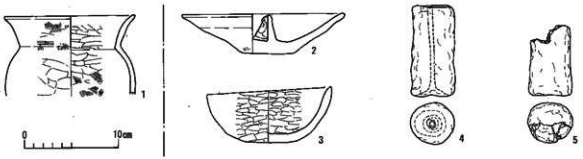


図24　O地点出土遺物(グリット1，H—21号住居址2～5)

H—19号住居址出土遺物（平安時代）L地点

番号	器　種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	胎土・焼成・色調	成・整形の特徴	備　考
14—1	土師器坏	13.3	3.9	5.1	砂粒良褐色	ロクロ・ヘラケズリ	
14—2	土師器坏	12.6	3.9	6.0	砂粒良褐色	ロクロ・糸切り痕	
14—3	土師器坏	12.5	3.7	6.2	砂粒良褐色	ロクロ・糸切り痕	
14—4	土師器坏	12.3	4.3	5.0	砂粒良褐色	ロクロ・糸切り痕	
14—5	黒色土器坏	—	—	6.4	砂粒良褐色	ロクロ・ヘラケズリ	
14—6	黒色土器坏	—	—	5.8	砂粒良褐色	ロクロ・ヘラケズリ	
14—7	須恵器甕	—	—	—	小石良青灰色	タタキ目	

H—20号住居址（古墳時代）L地点

14—8	土師器甕	19.5	22.6	9.6	砂・小石良乳褐色	ハケナデ・ナデ	甑に転用？
14—9	土師器甕	15.2	18.2	7.0	砂・小石良乳褐色	ハケナデ・ナデ	
14—10	土師器甕	18.6	29.5	7.6	砂粒良乳褐色	ハケナデ・ナデ	完形
14—11	土師器甕	16.2			砂粒良乳褐色	ハケナデ・ナデ	
14—12	土師器甕	—	—	7.5	砂粒良乳褐色	ハケナデ・ケズリ・ナデ	
14—13	土師器坏	12.7	4.4	—	砂粒良乳褐色	ヘラミガキ・内黒	完形
14—14	土師器坏	13.2	4.9	—	砂粒良乳褐色	ヘラミガキ・内黒	完形

H—20号住居址（古墳時代）O地点

23—1	土師器甕	18.7	30.4	8.1	砂・小石良乳褐色	ハケナデ・ナデ	完形
23—2	土師器甕	18.7	29.1	8.3	砂・小石良乳褐色	ハケナデ・ナデ	完形
23—3	土師器甕	18.7	24.1	7.8	砂・小石良乳褐色	ハケナデ・ナデ	完形
23—4	土師器甕	17.6	20.5	5.2	砂・小石良乳褐色	ハケナデ・ナデ	
23—5	土師器甕	23.9	(22.6)	(11.1)	砂・小石良乳褐色	ハケナデ・ケズリ・ナデ	完形
23—6	土師器甕	13.4	14.1	7.2	砂・小石良茶褐色	ヘラミガキ・ナデ・ミガキ	完形
23—7	土師器甕	13.1	11.9	6.2	砂・小石良茶褐色	ヘラナデ・ナデ	完形
23—8	土師器甕	15.0	—	—	砂・小石良茶褐色	ハケナデ・ナデ	
23—9	土師器甕	14.8	—	—	砂・小石良茶褐色	ハケナデ・ナデ	
23—10	土師器甕	—	—	8.8	砂・小石良茶褐色	ハケナデ・ナデ	
23—11	土師器甕	—	—	8.8	砂・小石良茶褐色		
23—12	土師器甑	16.2	15.1	5.0	砂・小石良茶褐色	ハケナデ・ナデ	完形
23—13	土師器甑	16.6	—	—	砂・小石良茶褐色	ハケナデ・ナデ	
23—14	土師器甕	15.4	—	—	砂・小石良茶褐色	ハケナデ・ナデ	
24—2	土師器蓋				良茶褐色	ナデ	
24—3	土師器坏				砂・小石不良乳褐色	ナデ	
		長さ	長径	短径			
24—4	土製支脚	9.7	4.7	4.4	砂・小石不良乳褐色		
24—5	土製支脚	(7.2)	4.7	4.2	砂・小石不良乳褐色		

表2　住居址出土遺物土器観察表

Ⅳ　写真でみる調査の成果

A　発掘調査

写真１　田草川尻遺跡航空写真

千曲川が悠々と流れる。対岸の中野市岩井地区は広い沖積地が広がっている。遺跡は、扇状地の張り出した末端面の千曲川川岸にある。Ｌ・Ｍ・Ｎ・Ｏ地点は今回の調査区。写真は下が北である。

L地点の調査

写真2　千曲川のほとりに位置する調査区（L地点）

写真3　重機による表土除去（千曲川洪水による土砂が堆積している）

写真4　調査風景（土層観察のための帯を残して掘り進める）

写真5　調査風景（土砂の堆積が予想以上に厚く手作業で掘り進める）

写真6　調査風景（過去の生活面付近に到達するとジョレン等で注意深く土層を識別しながら掘り進める）

写真7　調査風景（遺物・遺構が確認された場合は移植ゴテで慎重に掘る。調査で最も神経の使う仕事である）

写真８　土の堆積状況（Ｄ―14区　田草川氾濫による砂礫の堆積が著しい）

写真９　Ｈ19号住居址カマド（全体は確認できなかったがカマド本体は良好に検出された）

写真10　H19号住居址カマド内部（カマド内には坏が3点ほぼ原形を留めて発見された）

写真11　H20号住居址（古墳時代の竪穴住居）

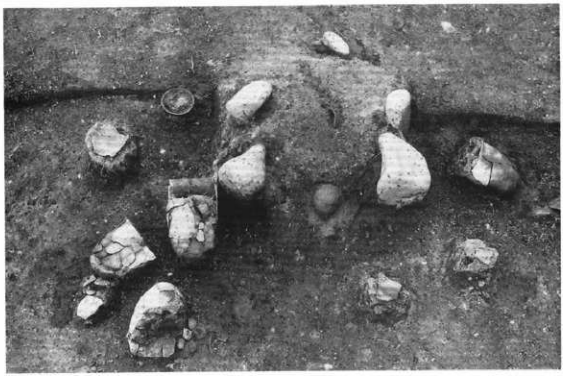


写真12　H20号住居址遺物出土状態（カマド周辺に使用していたそのままのような状態で出土した）

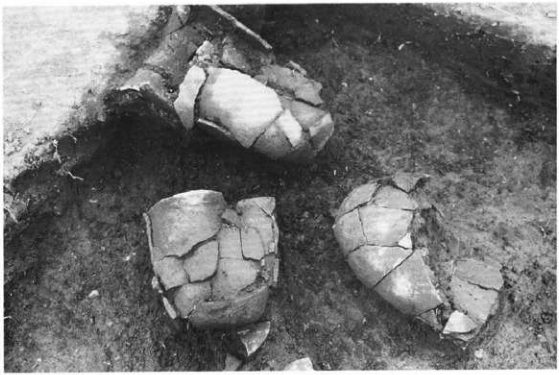


写真13　H20号住居址遺物出土状態

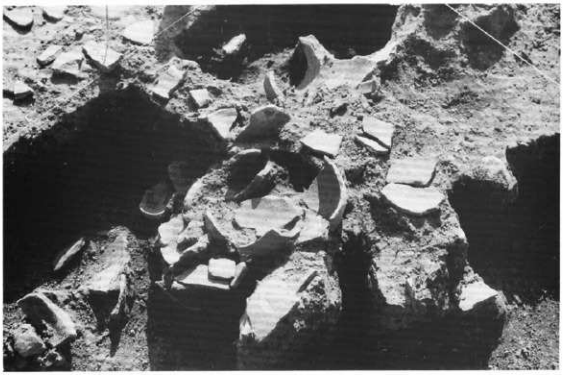


写真14　第１地点遺物出土状態（古墳時代）

写真15　弥生地点出土土器

写真16　柱 穴（建物になるかどうか不明である）

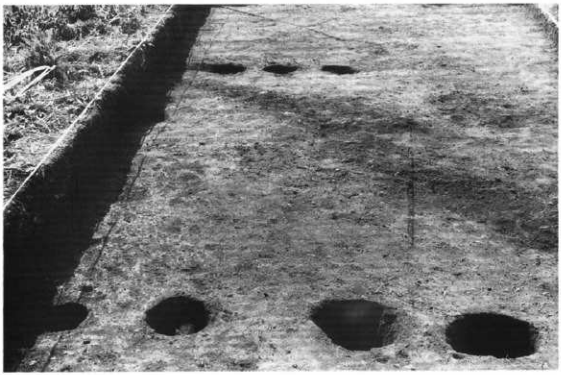


写真17　柱　　穴

M地点の調査

写真18　M地点近景（いいやまみゆき農協秋津給油所の前がM地点である）

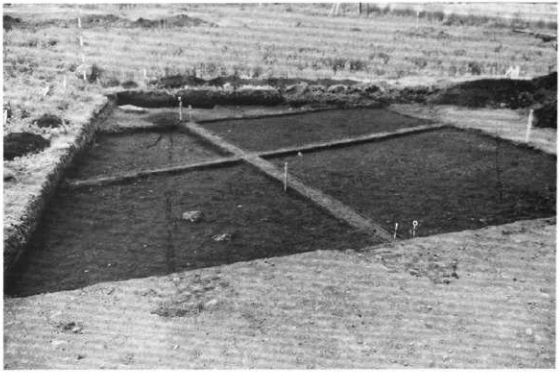


写真19　M地点調査完了（遺構は発見されなかった）

N地点の調査

写真20　N地点の調査風景

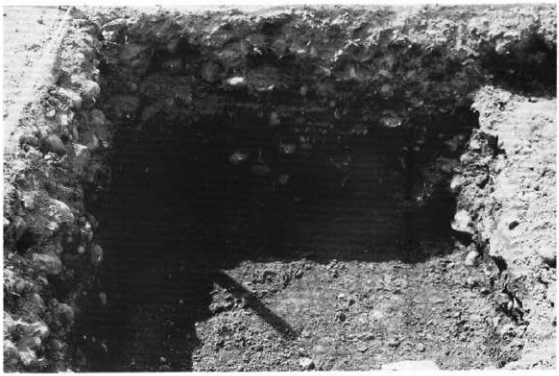


写真21　土 層（氾濫土砂が厚く堆積している）

O地点の調査

写真22　O地点調査風景

写真23　O地点調査区

写真24　H21号住居址の調査（古墳時代の家が予想外のところから発見された）

写真25　H21号住居址遺物出土状態（20号住居址と同様に原形を保って出土）

B 出土品

写真26　L地点　　第1地点

写真27　L地点　　弥生地点

写真28　H19号住居址

写真29　グリット

1

2

3

4

5

6

写真30　H20号住居址

1

2

3

4

5

6A

7

6B

8

写真31　H20号住居址

あとがき

昭和47年以来田草川尻遺跡は、7年次にわたる調査を繰り返してきた。調査面積は五千平米になろうとしている。そうした調査は、日程的には必ずしも満足できるものではなかった。多くの原因が中・小規模の業者委託によるものであるから、最低条件のなかで埋蔵文化財の保護を計ることも当然のことと思える。ただし、調査の結果については調査を担当したものが責任を負うものである。その意味で、今回の調査報告書もきわめて不充分な内容であり、反省しなければならない。

昭和63年以来平成3年度まで飯山市の埋蔵文化財の発掘調査はピークを迎えた。まさに発掘ラッシュであった。ようやく落ち着きを取り戻しつつあり、膨大な考古資料の詳細な整理作業とともに活用を計ることが必要とされている。

最後に、本書を刊行するにあたり御協力頂いた多くの皆様に御礼申し上げます。

飯山市遺跡調査会（平成2年度）

顧　　問	小野沢静夫	市　長（平成２年９月14日退任）
	小山　邦武	市　長（平成２年９月15日就任）
会　　長	佐藤　春夫	教育委員会委員長
副 会 長	長谷川元一	社会教育委員長
委　　員	吉沢菊之進	文化財保護審議会会長（平成２年10月26日退任）
	滝沢藤三郎	文化財保護審議会会長（平成２年11月２日就任）
	藤沢賢一郎	議会総務文教委員長（平成２年12月11日退任）
	丸山　豊雄	議会総務文教委員長（平成２年12月12日就任）
	中 村　敏	公民館長
	高 橋　桂	日本考古学協会会員
	山崎美都枝	教育委員会委員長職務代理
	浦野　昌夫	教育委員会教育長（平成２年12月24日退任）
	岩 崎　彌	教育委員会教育長（平成２年12月26日就任）
事務局長	佐 藤　清	教育委員会教育次長
事務局次長	渡 辺　博	教育委員会社会教育係長
事 務 局 員	堀内　隆夫	教育委員会社会教育主事
	望月　静雄	教育委員会社会教育係
	樋山二二子	

調　査　団

団　　長	高 橋　桂	飯山北高等学校教諭
担　　当	望月　静雄	
調 査 員	常盤井智行	
〃	田村　況城	
〃	小林　新治	
〃	丸山　三二	
〃	常田　利夫	

発掘作業参加者（順不同・敬称略）

清水三名　常田レエ子　市村ますみ　芳川昭治　達家わかの　小林則義　村松修司　緒瀬光司　樋口栄　桃井伊都子　芳川きみ

整理作業参加者

綿田茂美　小林みさを　北山けさえ　山崎満枝

飯山市埋蔵文化財調査報告　第28集　田草川尻遺跡Ⅶ　　平成３年11月発行
編集・発行　長野県飯山市教育委員会
印　　刷　㈲岸田孔版印刷所